

1 計画的に作業を進めましょう

○播種量、田植え予定日を考慮し、播種日を決めましょう（右表）。

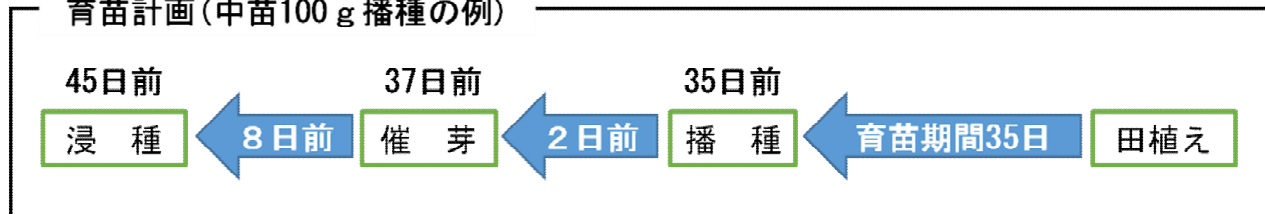
○必要以上に育苗日数が長すぎると老化苗となります。

○あきたこまち、めんこいな、ゆめおぼこについては、播種量を乾籾 250g 程度として無加温出芽で 20～25 日間程度の育苗で、機械移植の適性が確認されています。（<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/53791>）

表 苗質の目安

播種量(乾籾)	100g/箱	180g/箱
育苗日数	35日	25日
目標葉数	3.5葉	2.5葉
目標草丈	13～15cm	10～13cm

育苗計画(中苗100g 播種の例)



2 適切な種子予措

①浸種の水温・水量に注意を

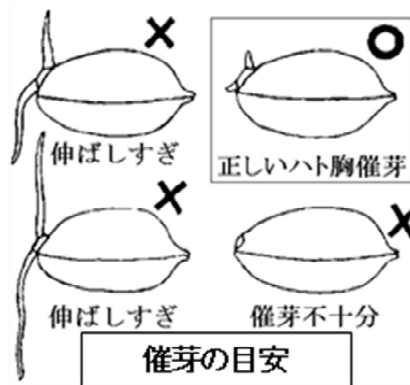
- ・種子消毒・浸種は屋内で行い、お湯で水温が 15℃になるように調整します。水温が 10～15℃を確保できるように、消毒・浸種の開始は早くとも 4月上旬からとします。
- ・種子籾を籾袋に入れる際は、袋の 50～60%を目処とし、浸種水温は 10～15℃、浸種水量は種子容量の 2 倍程度（種子 1kg に対し水 3.5L）となるように努めます（水温が低いと発芽ムラや種子消毒の効果低下を生じます）。
- ・複数の品種、消毒方法の異なる種子を同じ容器で浸種・催芽しないでください。

②水の交換は適切に

- ・種子消毒の効果を高めるため、浸種開始後から 2 日間は水の交換をしません。浸種期間は、浸種水温 10℃で 6 日～8 日程度、14℃で 6 日程度とし、種子消毒剤の安定した薬効を確保するため、水交換は 2～3 回とします。
- ・浸種終了の目安は、籾殻を透かして胚が白く見えるようになる頃です。

③催芽の前には必ず湯通しを

- ・催芽は芽の長さを揃えるために必要な作業です。袋内部の種子まで均一な温度になるよう、36～40℃の温水で必ず湯通しを行います。催芽温度は 30～32℃で、芽の長さはハト胸程度（催芽長 1mm）とします。



④衛生環境

- ・種子予措を行う作業場所やその周辺を十分に清掃します。また、浸種・催芽時は容器にふたをします。容器等は使用前や品種、消毒方法が変わる毎に十分洗浄します。

3 出芽・育苗期間の管理（中苗の場合）

①出芽

・出芽長 5mm 程度を目標に確保したら、被覆資材を除去します。伸ばしすぎは徒長苗の原因となります。出芽後の再被覆は、もみ枯細菌病等の発生を助長するため、行いません。

②水管理

・かん水は早朝に行い、1回のかん水量を多く、回数を少なくします。育苗後半は、床土が白く乾いたり、葉が巻き始めた場合はかん水します。

③温度管理

・播種から出芽までは約 30℃、緑化期以降は 25℃以上にならないようにします。ハウス内の温度が上がりすぎる場合は被覆資材除去前でも通風管理で温度を下げます。移植 1 週間前頃からは、低温日でない限り、夜間もハウスを開放して外気に当て、硬い苗に育てます。

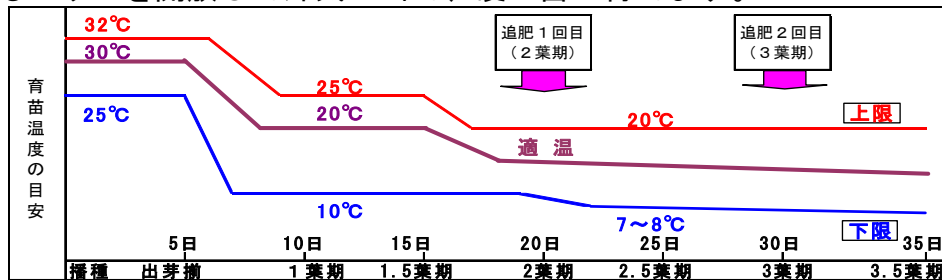
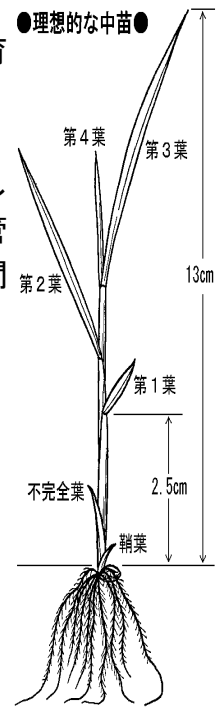


図 育苗温度の目安（中苗の場合）



④追肥

・追肥を行う場合は、窒素成分で箱当たり 1g（2葉期と3葉期頃）施用します。

4 いもち病の防除対策

- いもち病の発生は育苗施設からの発病・感染苗の本田への持ち込みが主な要因です。
- 育苗期いもち防除は下記表の薬剤を必ず実施し、育苗施設からの発病・感染苗の本田への持ち込みを防ぎましょう。
- なお、タフブロックやエコホープDJ（生物農薬）を使用した場合は、生物農薬による種子消毒の効果が低下するため、ベンレート水和剤の播種時処理は行いません。

○育苗期防除剤（苗いもち防除）

農薬名	使用時期	希釈倍数・散布量
ベンレート水和剤	播種時～播種7日後頃（かん注）	1,000倍 1,000mL/箱
	播種時～播種14日後頃（かん注）	500倍 500mL/箱
ビームゾル	緑化始期（かん注）	500倍 500mL/箱

5 苗立枯病の防除対策

○耕種的防除対策として、清潔な資材を使用するなど、育苗施設の衛生を保ち、栽培基準に基づいた適切な温度管理と水管理を行います。

○苗立枯病菌は数種あり、それぞれ防除薬剤が違います。

○リゾープス菌に対しては、発芽後の薬剤防除は効果が劣るので、ハウス内の高温に注意し、ベタ張りを長期間行わないようにしてください。



美の国あきたネットの【水稲新品種「あきたこまちR」を紹介します!】

(<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/73119>) をご覧ください



QRコードはこちら